

木の^こ下^{した}かげを宿^{やど}として

花^{はな}や今宵^{こよひ}の主^まぞと

うたふ心^{こころ}は優^{やさ}さしくも

今宵^{こよひ}一^{いっ}夜^やの宿^{やど}からん

よすがは絶^たえて白波^{しらなみ}や

御影^{みかげ}大石^{おおいし}打^{うち}過^すぎて

猶^{なほ}も進^{すす}めば一^たの谷^{たに}

孤城^{こじやう}落^{らく}日^{にっ}支^しふ間^まも

鶴越^{ひよどり}の夜^よあらしに

頼^{たの}むこゝろもあだ櫻^{ざくら}

惜^をしや明日^{あす}をも待^まちあえす

花^{はな}の姿^{すがた}はちりにけり

花^{はな}の姿^{すがた}はちりぬれど

ちとせもゝとせ後^{のち}の世^よの

文^{ぶん}讀^よむ人^{ひと}のためにとて

残^{のこ}せる形見^{かたみ}の一^{ひと}枝^{えだ}は

千載^{せんざい}集^{しよ}にとといまりぬ

千載^{せんざい}集^{しよ}にとといまりぬ

保育者^{ほいくしや}のため

幼稚園^{ちゆういん}に於^おける自然^{しぜん}研究^{けんきゆう}(二)

平山^{ひらやま}ひさ

▼凡^{すべ}ての動物^{どうぶつ}は幼^{えう}兒^じに對^{たい}して親^{した}しい友^{とも}達^{たち}であるの
で、大^{だい}人^{にん}が見^みてさほどにない物^{もの}でも幼^{えう}兒^じは愛^{あい}らし
として近^{ちか}づくものである。それ^{それ}に大^{おとな}人^{ひと}は時^{とき}として
幼^{えう}兒^じが喜^{よろこ}んで友^{とも}として居^ゐる動^{どう}物^{ぶつ}を勝^か手^てに嫌^{きら}つて、
折^{せつ}角^{かく}動^{どう}物^{ぶつ}を愛^{あい}する心^{しん}情^{じやう}の萌^も芽^がを幼^{えう}兒^じから抜^ぬき去^さる
事^{こと}が多い。尤^{もつと}も毒^{どく}のある虫^{むし}を恐^{おそ}れさせるのは賢^{かしこ}い
事^{こと}なので、其^{その}時^{とき}には、そ^そういふ虫^{むし}は戸^と外^{そと}に置^おく方^{ほう}

がよい、其虫は戶外に居る方が幸なのである、戶外で容易く見る方が安全でよい、など、靜かに教へてやるがよろしい。併し無害の動物を幼児が持つて来た時に大人が理由もなくいやがつたり、甚しいのは幼児の目前でそれを殺してしまふなどは決してしてならぬ事である。

▼幼児は動物を愛する様に、木の葉とか草花とか凡て植物に對して興味を有つものである。そうして段々進んで其植物を發達させる内部の力を知りやうになつて来る、それ故に幼児が地に種子を蒔いて其生育に由て自然の力を認めるのは誠に有益な事である。

▼自然といふ點から考へると、幼児は田舎で育つ方が幸福である。町の幼児を田舎へ連れて行つて其喜んで活動する様を見ると、都に居る時には何

をして居つたかと氣の毒に思はれる。田舎では周圍に自然が満ちて居るから、幼児にとつて都合がよろしい。併し之に向つて導を與へねば何にもならぬので、萬物に向つて幼児の目や耳を開く様に導いてやる事が必要である。

▼幼児のいろ／＼の作業の一として植物の世話をさせるのは良い事であるといふ事は、今日では疑のない事になつて居るので、フレール氏も己に之を良しとして、方々の幼稚園の兒等が地面の一部分を有つて自分で掘り自分で耕し自分で種子を蒔いて之を培養する様にしたい。保姆の指導の下に絶えず植物の世話をさせたい。と言はれて居る。其植物はなるべく生長しやすい培ひやすい殖やししやすい物がよいので、容易に葉や花ができて大きくなる普通のものがよろしい

▼そうすると幼児は之に由て植物生育の自然の微妙な力を知らずくに悟り、只口では教へられぬ訓を無言の間に受ける事になる。そうして保姆と幼児の協力の結果、其處にできた花はかざりに、野菜は食用に、豆は豆細工に、種子は翌年の爲にといふ風に、實用に供する事ができる。

▼幼児の一人々々に少しばかりの土地を興へるといふ事は、都會の狭い幼稚園では、到底望み得られぬとしても、何か保姆が工夫をして、幼児に向つて植物が芽を出す、大きくなるといふ次第を見せたいものである。たとへば箱庭様のものを作り、たとひ少しでも其中に何か植ゑるとも、又は植木鉢を日あたりのよい窓の處に置かうとも、又は只水中にさへ置けばよい植物を瓶で養はうとも、何かそこに方法がありそうなもので、之に由りて幼

児は水をやるとか日光を十分に與ふるとか樂んで植物の爲に善をなす事ができる。自分の幼稚園は狭いから大きな森を園内に作る事ができぬといふ理由で最も小なる種子を蒔く位の事もせぬといふ筈はない。

井上博士の幼稚園談

文學博士井上圓了氏は先頃雑誌「日本の小學教師」に「教育事業及慈善事業を論じて幼稚園のことに及ぶ」といふ題で一文を載せられた。吾人は博士の如き知名の人が漸く幼稚園事業に着目するに至つた機運の來たのを喜ぶ。博士は既に自ら園主となりて昨月より幼稚園を開設せられた。恐らく今後は同博士の意見を屢々聞くことも出來よう。今左に博士の論文を轉載する。尤